

ケースビネット法を利用したシミュレーションによる HIV 感染者のカミングアウト（感染事実の表明）に関する研究

荒川 長巳*

目的 HIV 感染は確実に拡大しているが、性活動性の高い大学生はこれに対しての危機感が希薄である。これは、AIDS あるいは HIV 感染が身近なものでなく自分のこととして認知できないためと思われる。一方、AIDS 患者・HIV 感染者は社会からの差別・偏見を恐れてカミングアウトできない状況であり、そのため感染の危険を感じても HIV 抗体検査を受診する人が少なく捕捉率は上昇しない状態である。従来 AIDS・HIV 感染に対する差別・偏見対策は、まず差別・偏見をなくして、カミングアウトできる状況をつくるという発想で行われてきたが、実際にカミングアウトする人は極少数である。現実にかミングアウトできる状況かどうかの検証は、カミングアウトの危険性が高すぎて困難である。そこで本研究は、ケースビネットを利用してシミュレーションすることでカミングアウトへの影響を検討しようとするものである。

方法 血液製剤による感染と性行為による感染（男性のケースと女性のケース）のそれぞれに対して感染経路別にカミングアウトした場合としない場合のケースビネットを作成し、それぞれの場合の感染者のイメージと彼らの置かれるであろう状況や調査対象者の感染者への態度等を質問紙を用いて調査した。対象は、大学生1,128人（男子学生487人、女子学生641人）であった。

成績 感染経路に関係なく、カミングアウトした場合の方が、感染者に対する好意的なイメージは強化され、また、拒否的なイメージは弱くなった。しかし、感染者の置かれるであろう状況や調査対象者の感染者への態度等は、カミングアウトによる影響をほとんど受けなかった。感染経路別の比較では、血液製剤による感染の場合の方が、性行為による感染の場合より感染に対して責任がなくより同情されるという結果であったが、その他の項目については概ね差異はなかった。女子学生の方が男子学生に比較して感染者に好意的に回答する傾向が認められた。

結論 今回の調査から、大学生はカミングアウトした感染者に対してイメージが肯定的になるであろうこと、しかしイメージが好転しても感染者の状況や学生の態度などは変化しないと考えていることがわかった。実効性のある差別・偏見対策が望まれる調査結果であった。

Key words : エイズ, HIV 感染者, カミングアウト, 差別・偏見, シミュレーション

I 緒 言

世界保健機関（WHO）の報告によれば、HIV（Human Immunodeficiency Virus）は、依然感染拡大を続けているが、日本においても来日後に HIV 感染（以下、単に感染）した可能性のある外国人の症例¹⁾や16歳日本人女性の異性間性行為による感染例（日本人としては、母子感染を除いて過去最年少²⁾など、感染の国内化・若年化の兆候が明確になってきている。著者は性活動性の

高い大学生に対して感染予防の教育をしているが、彼らはエイズ（AIDS, Acquired Immuno-deficiency Syndrome）あるいは HIV に関する知識は有してはいても、当事者としての意識は低く、実際の性行為の場での確に予防行動がとれるかどうかは疑問である^{3,4)}。これは、日本においては AIDS 患者（以下、単に患者）あるいは HIV 感染者（以下、単に感染者）が少なく、感染を身近に感じるができないためと思われる。日本における感染者累積報告数は3,500人を超えているが、カミングアウトした感染者は極めて少ない。これは感染事実が社会に知られた場合、差別や偏見を受けるのではないかという恐れが感染者にあるためと思われるが、感染者が差別

* 島根大学保健管理センター
連絡先：〒690 島根県松江市西川津1060
島根大学保健管理センター 荒川 長巳

・偏見への恐怖からカミングアウトのできない状況が続けば、感染の危険性の高い行動をとっている人々は感染が拡大しているとの認識のないまま危険な行為を続け、感染が拡大していくという悪循環が続くことになる。反対に、感染者が安心してカミングアウトできる環境になれば、HIV抗体検査の受診者が増え、捕捉率が上昇し、感染の事実を知っている感染者が増加し危険な性行動は抑制されるため感染の拡大が抑止されるという好循環が生じる可能性がある。そのためには、差別・偏見防止教育を充実し感染者が安心してカミングアウトできる環境を作ることが重要ではあるが、実際に感染者への差別・偏見がなくなったことを証明する方法がなく、感染者の社会への不信感存続しておりカミングアウトの例は極めて少ない現状が続いている。

そこで、著者は「差別・偏見をなくしてカミングアウトできる状況を作る」という発想から逆に「まず先にカミングアウトがあることによって、イメージが好転し差別・偏見的態度が抑制される」のではないかという仮説をたててみた。ところが、現状では、カミングアウトのリスクが高すぎてこの仮説を実証することはできない。そこで、質問紙上でカミングアウトをシミュレーションしてその影響を検討することとした。その際、従来の差別・偏見の意識調査によって調べられた結果は建前論的で現実的ではないという批判があるので、今回は調査方法としてより投影的な方法で表面的な態度より深層の態度を調査することのできるケースビネット法を採用した^{5,6)}。

Ⅱ 研究方法

1. 対象

対象者は、国立S大学学生764人（男子学生393人、女子学生371人）、国立A大学学生96人（男子学生94人、女子学生2人）、S県立女子短期大学女子学生268人の合計1,128人（男子学生487人、女子学生641人）である。

2. 調査方法

3種類の感染経路（血液製剤による感染と異性間性行為による感染（男性のケースと女性のケース））を想定し、それぞれに感染者が感染を知った後カミングアウトした場合とそうでない場合の2種類のケースビネット（表1）を作成し、合計

表1 ケースビネット（性行為による感染（男性）の場合）

i) カミングアウトしない場合

X男は大学を卒業した後、ある会社に就職した。彼は仕事を人並みにこなしており特に目立つ存在ではなかった。ところが、やがて彼の健康状態が悪化し始め、疲れやすくなり体が衰弱し、体調が良くなったり悪くなったりすることを繰り返すようになった。病院を受診したところ、医師からエイズウイルスに感染していることを知らされた。感染源は大学時代親しかった異性の友人と思われた。その時点で、外見からはX男に異常があることはわからず彼は感染していることを黙って仕事を続けていた。

ii) カミングアウトした場合

X男は大学を卒業した後、ある会社に就職した。彼は仕事を人並みにこなしており特に目立つ存在ではなかった。ところが、やがて彼の健康状態が悪化し始め、疲れやすくなり体が衰弱し、体調が良くなったり悪くなったりすることを繰り返すようになった。病院を受診したところ、医師からエイズウイルスに感染していることを知らされた。感染源は大学時代親しかった異性の友人と思われた。その時点で、外見からはX男に異常があることはわからなかったが、彼は感染していることを上司に話し同時に職場全体に彼が感染していることを知らせた。

6種類の質問用紙を用意した。6種類の質問用紙は無作為に混合され学生に配布された。学生は、ケースビネットを読んだ後、ケースの人物に関するイメージと彼らのとるであろう態度等について、「そう思う」、「どちらかといえばそう思う」、「どちらかといえばそうは思わない」、「そうは思わない」の4つの選択肢から1つを選ぶように指示された。前半のイメージに関する質問は、20個の人格を表現する語句についてどう思うかを問うている。20個の語句については宗像らの先行する調査^{5,6)}を参考にし、半数を好意的なイメージ半数を否定的なイメージに割り振った。後半の14問は、調査対象者が、感染を他人事としてどのようにみているか、自分は感染者とどう付き合っていくか、自分が感染者ならどうするのかなどについての質問である。

調査は、講義時間の始まりに集団無記名自記式で行われた。

結果は、「そう思う」、「どちらかといえばそう

思う」、「どちらかといえばそうは思わない」、「そうは思わない」の4つの選択肢にそれぞれ1点から4点を割り振って、項目毎に順位和検定(Mann-Whitney U-test)を実施した。また、平均点を算出し、これを折れ線で繋いで図に示した(図1~6)。図表の*の下()内の数字は順位和の平均を表し、数字の小さい方がより肯定的回答が多かったことを示している。

Ⅲ 結 果

1. 対象者の内訳

調査対象1,128人のうち、血液製剤による感染のケースに回答したのは、男子168人女子203人合計371人(カミングアウトしないケースには男子85人女子104人合計189人、カミングアウトしたケースには男子83人女子99人合計182人)、性行為による感染のケース(男性)に回答したのは男子164人女子218人合計382人(カミングアウトしないケースには男子82人女子109人合計191人、カミ

ングアウトしたケースには男子82人女子109人合計191人)、性行為による感染のケース(女性)に回答したのは、男子156人女子219人合計375人(カミングアウトしないケースには男子74人女子112人合計186人、カミングアウトしたケースには男子82人女子107人合計189人)であった。

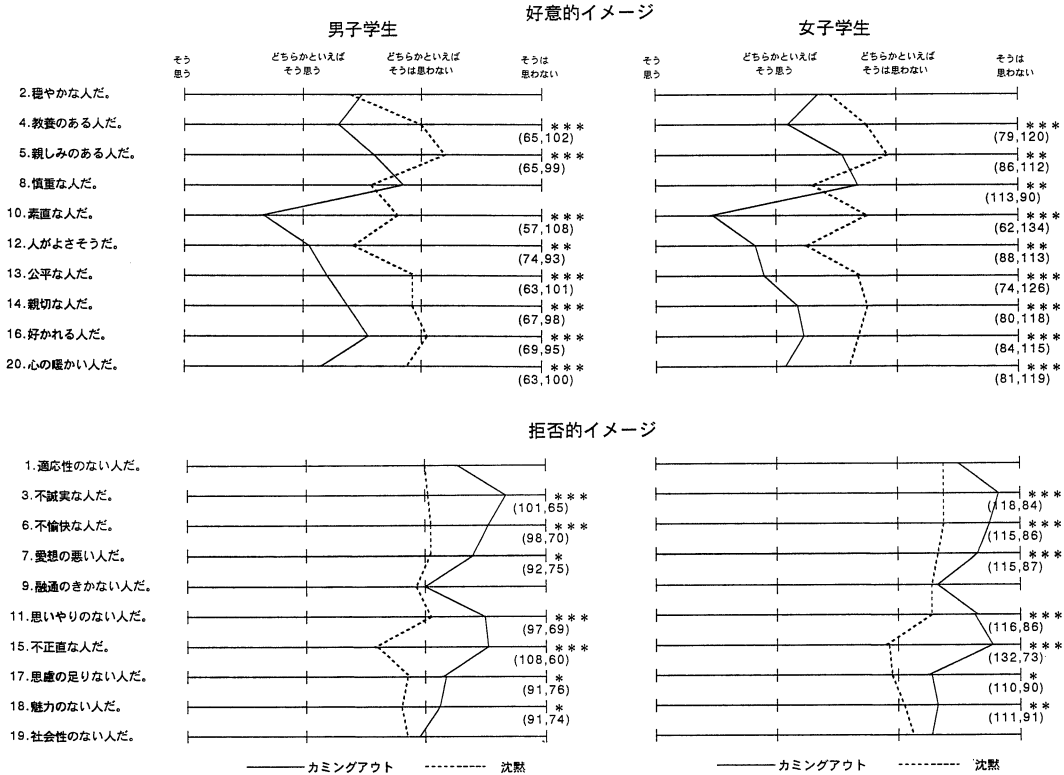
2. カミングアウトの影響

1) 好意的・拒否的イメージについて(図1~3)

カミングアウトしない場合(図中では沈黙と表現している)の好意的イメージの項目における平均点の大半は、対象が男子学生で性行為による男性の感染の場合(図2)を除いて、「どちらかといえばそう思う」と「どちらかといえばそうは思わない」の間にあり、一方、拒否的イメージの項目における平均点は全体として過半数が、「どちらかといえばそうは思わない」と「そうは思わない」の間にあった。

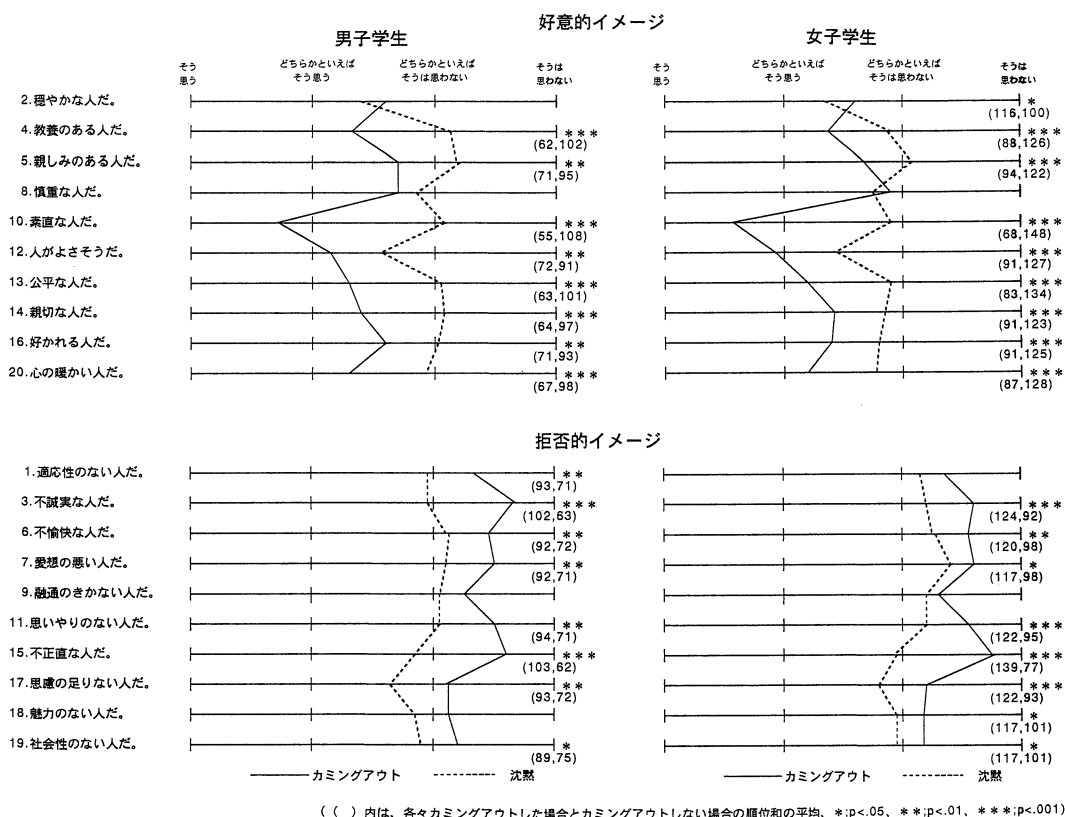
カミングアウトしない場合とカミングアウトし

図1 HIV 感染者のイメージ(血液製剤による感染の場合)



() 内は、各々カミングアウトした場合とカミングアウトしない場合の順位和の平均、* : p<.05、** : p<.01、*** : p<.001)

図2 HIV感染者のイメージ(性行為感染による男性の場合)



た場合を比較すると、好意的イメージでは、感染経路・回答者の性別に関係なく8項目以上の項目において有意差が認められた。これは、カミングアウトした場合の方に、肯定的回答が多かった(図においては、実線の方が左側にある)ためであった。「穏やかな人だ」と「慎重な人だ」の項目では有意差が認められないことが多かったが、女子学生においては血液製剤による感染の場合の「慎重な人だ」の項目(図1)と性行為による男性の感染の場合の「穏やかな人だ」の項目(図2)で、逆にカミングアウトした場合の方が否定的回答が多く有意差が認められた。一方、拒否的イメージについては、男女学生ともカミングアウトした場合に否定的に回答する傾向が認められ(実線の方が右側にある)、過半数の項目において有意差が認められた。「適応性のない人だ」と「融通のきかない人だ」の項目では有意差が認められないことが多かった。

2) 態度等について(図4~6)

カミングアウトしない場合の態度等についての14項目の回答では、感染経路・回答者の性別に関係なく、「X男(X子)は隔離されるべきだ」、「X男(X子)は会社を辞めるべきだ」、「X男(X子)は他人にとって危険である」の3項目において否定的回答が多く、「X男(X子)はとても苦しんで悩んでいる」、「X男(X子)が最善の医療を受けるのは当然だ」の2項目において肯定的回答が多かった。また、「あなたならX男(X子)と同じ職場で働く」、「あなたならX男(X子)を宴会に誘う」、「あなたがX男(X子)の立場なら病気のことは秘密にしておく」、「あなたがX男(X子)の立場になれば周囲の人は冷たくなる」の項目でも肯定的回答が多い傾向が認められた。そのほか、血液製剤による感染では、「X男が病気になったのは彼の責任だ」の項目において否定的回答が多かった。

図 3 HIV 感染者のイメージ（性行為感染による女性の場合）

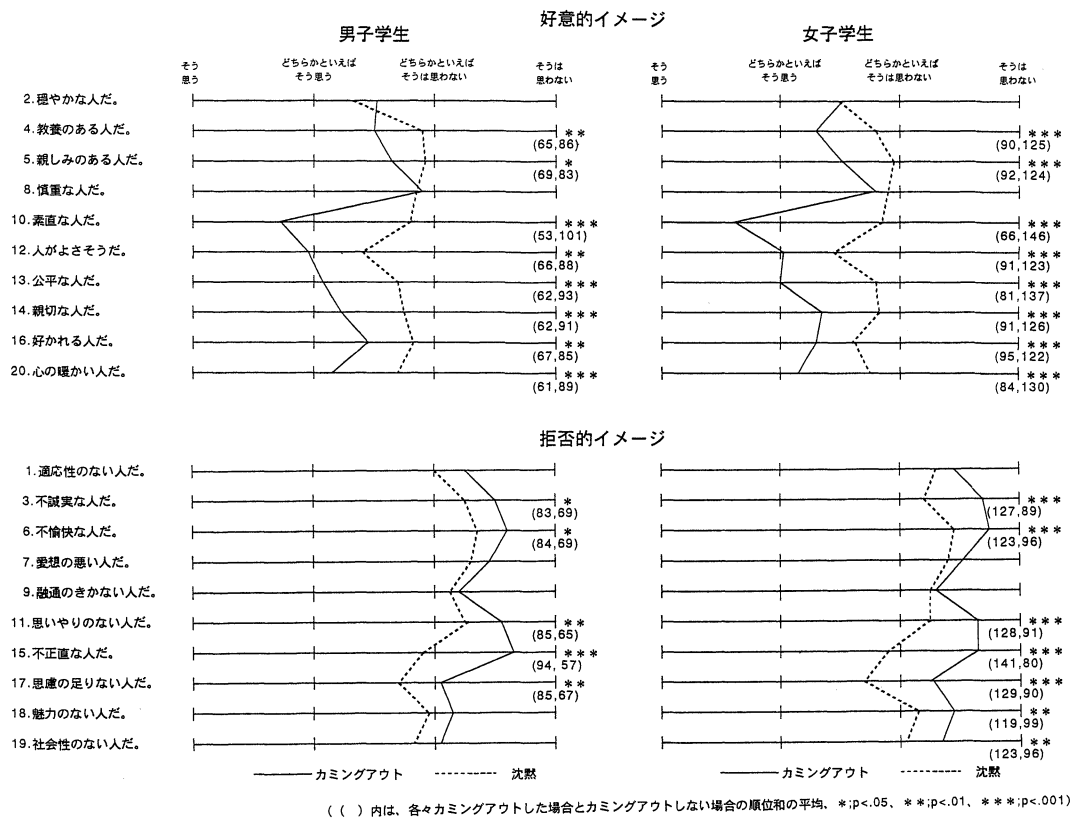


図 4 HIV 感染者に対する態度（血液製剤による感染の場合）

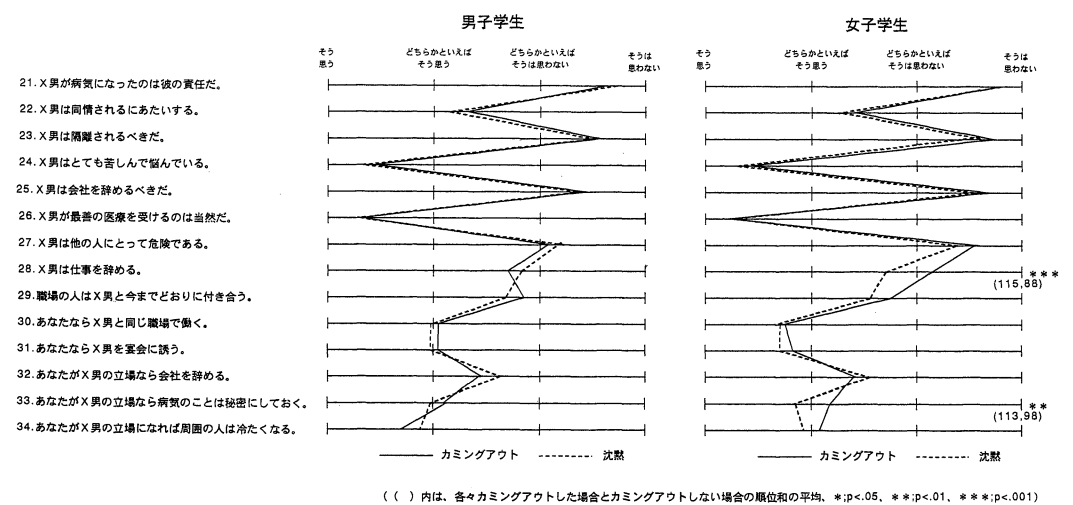


図5 HIV感染者に対する態度（性行為感染による男性の場合）

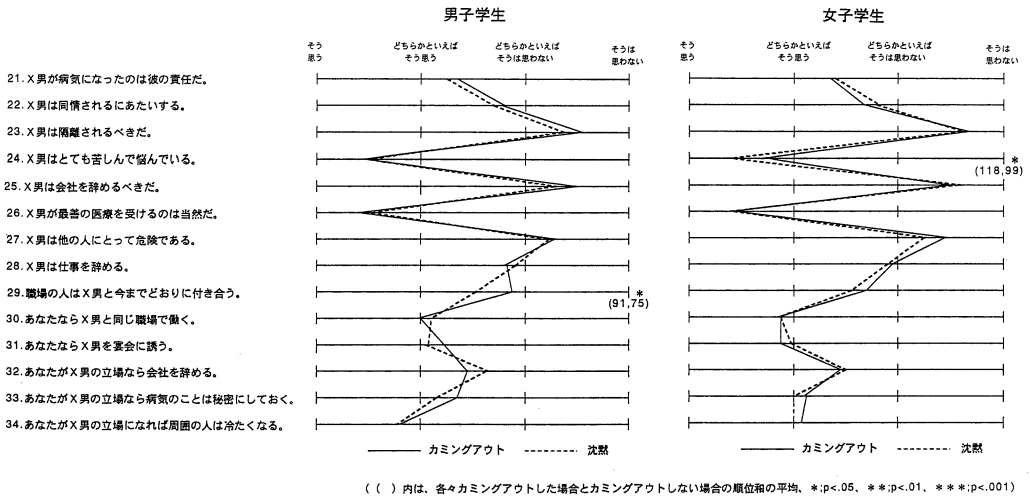
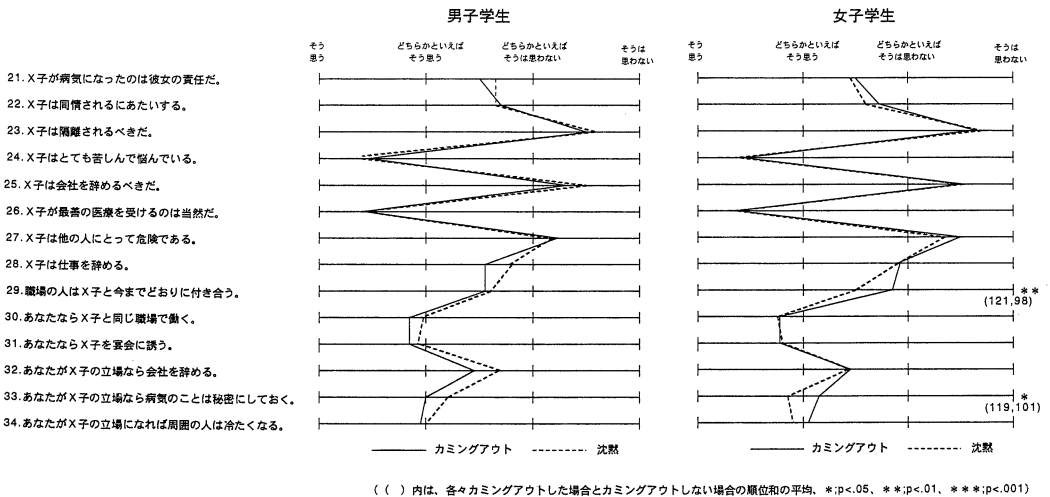


図6 HIV感染者に対する態度（性行為感染による女性の場合）



カミングアウトしない場合とカミングアウトした場合と比較すると、有意差を示した項目は極めて少なく、感染経路や回答者の性別に関係なく散発的で、全体として顕著な傾向は認められなかった。

3. 感染経路による差異（表2）

感染経路によって回答に差異が生ずるかどうかを血液製剤による感染の場合と性行為による感染の場合（男性の場合のみ）を比較した。カミングアウトの有無あるいは回答者の性別に関係なく著明な有意差が認められたのは、「X男が病気にな

ったのは彼の責任だ」と「X男は同情されるにあたいする」の2項目であった。血液製剤による感染の場合の方が、前者では否定的回答が有意に多く、一方後者では肯定的回答が有意に多かった。

そのほかの項目においては、男子学生より女子学生の方に有意差を認めた項目が多く、また女子学生に関してはカミングアウトしない場合に比較してカミングアウトした場合の方が有意差を認めた項目が多かった。イメージに関する項目では、血液製剤による感染の場合の方が好意的イメージ

表 2 感染経路別の比較

項目/対象	沈 黙		カミングアウト	
	男子学生	女子学生	男子学生	女子学生
穏やかな人だ				* (94.111)
教養のある人だ				** (92.112)
慎重な人だ		*** (92.120)		
素直な人だ	*** (76.90)			
公平な人だ				** (93.112)
親切な人だ				* (93.111)
適応性のない人だ		* (114.99)		
不誠実な人だ		* (115.99)		** (112.92)
不愉快な人だ				* (111.97)
X 男が病気になったのは彼の責任だ	*** (114.53)	*** (148.65)	*** (107.57)	*** (147.66)
X 男は同情されるにあたいする	** (72.97)	*** (91.121)	*** (70.96)	* (95.113)
X 男はとても苦しんで悩んでいる				* (94.112)
X 男は会社を辞めるべきだ				* (112.98)
X 男が最善の医療を受けるのは当然だ	** (76.93)			** (95.113)
あなたなら X 男を宴会に誘う		* (97.115)		

(()内は、各々血液製剤による感染の場合と性行為による感染の場合 (男性) の順位和の平均、
* : $p < .05$, ** : $p < .01$, *** : $p < .001$)

の項目において肯定的回答が多く、拒否的イメージの項目において否定的回答が多かった。態度等の項目については、血液製剤による感染の場合の方に、「X 男が最善の医療を受けるのは当然だ」などの項目では肯定的回答が、「X 男は会社を辞めるべきだ」の項目では否定的回答が有意に多かった。

4. 回答者の性別による差異 (表 3)

感染経路別、カミングアウトの有無別に分類し、男女学生の回答を比較した。

血液製剤による感染の場合に、回答者の性別による差が最も著明に現れた。イメージに関する項目については、カミングアウトの有無にかかわらず、女子学生の方が、好意的イメージの項目に肯

定的に回答し、一方拒否的イメージの項目に否定的に回答していた。態度等の項目に関しては、カミングアウトした場合に性別による差が多く生じていた。「X 男は隔離されるべきだ」、「X 男は会社を辞めるべきだ」、「X 男は他の人にとって危険である」、「X 男 (X 子) は仕事を辞める」、「あなたが X 男の立場になれば周囲は冷たくなる」の項目では、女子学生の方が否定的に回答する傾向を示した。また、「あなたなら X 男と同じ職場で働く」、「あなたなら X 男を宴会に誘う」の項目では、女子学生の方が肯定的に回答していた。

性行為による感染の場合には、全体的に有意差を示す項目は少なくなっているが、傾向としては血液製剤による感染の場合と同じであった。ただ

表3 回答者の性別による差異

項 目	血液製剤による感染		性行為による感染(男性)		性行為による感染(女性)	
	沈黙	カミングアウト	沈黙	カミングアウト	沈黙	カミングアウト
教養のある人だ	*		*			
	(103.86)		(104.88)			
親しみのある人だ	*					
	(101.84)					
公平な人だ	*	*				
	(103.85)	(98.83)				
親切な人だ			*			
			(102.88)			
好かれる人だ	***	**		*		
	(106.81)	(100.81)		(103.88)		
心の暖かい人だ	*					
	(103.86)					
適応性のない人だ	*				*	
	(84.102)				(84.98)	
不誠実な人だ	**	*				
	(83.104)	(82.93)				
不愉快な人だ	**	*				
	(83.102)	(83.97)				
愛想の悪い人だ		*	*			
		(81.97)	(84.102)			
融通のきかない人だ	*	*				
	(85.102)	(82.97)				
思いやりのない人だ	*					
	(85.101)					
不正直な人だ	*	**				
	(84.102)	(80.100)				
魅力のない人だ	*					**
	(85.100)					(81.100)
社会性のない人だ	**	*				*
	(84.103)	(80.98)				(82.101)
X 男 (X 子) は隔離されるべきだ		*				
		(84.98)				
X 男 (X 子) は会社を辞めるべきだ		*	*			
		(83.99)	(86.102)			
X 男 (X 子) は他の人にとって危険である		***				
		(77.103)				
X 男 (X 子) は仕事を辞める		**				*
		(80.100)				(82.100)
職場の人はX 男 (X 子) と今までどおりに付き合う						*
						(84.101)
あなたならX 男 (X 子) と同じ職場で働く	**	*				
	(105.86)	(99.82)				
あなたならX 男 (X 子) を宴会に誘う	*					
	(104.88)					
あなたがX 男 (X 子) の立場なら病気のことは秘密にしておく					*	
					(102.86)	
あなたがX 男 (X 子) の立場になれば周囲の人は冷たくなる		**		*		
		(77.99)		(85.101)		

(()内は、各々男子学生と女子学生の順位和の平均, * ; p<.05, ** ; p<.01, *** ; p<.001)

し、性行為による感染の女性の場合において、カミングアウトしない場合の「あなたがX子の立場なら病気のことは秘密にしておく」の項目には女子学生の方がより肯定的に回答しており、一方、カミングアウトした場合の「職場の人はX子と今までどおりに付き合う」という項目にはより否定的に回答していた。

Ⅳ 考 察

一般的には、エイズに関する正確な知識が普及し差別・偏見防止教育が成果をあげれば、カミングアウトができる状況が出現するものと考えられ、精力的に教育が続けられている^{7,8)}。その結果、種々の調査では概ね患者・感染者への差別・偏見は良くないという回答が多いのであるが、これらの結果は建前論とみなされてそこから進捗しなくなっている。そこで、本研究では、まずカミングアウトがあり、周囲の人が患者・感染者に「なじむ」ようになると、オルポールの言うように「なじんでいるもの」は「善」という感覚が生じて⁹⁾、患者・感染者に対する差別・偏見は実際上減弱するのではないかという仮説をたて、ケースビネット法を利用してカミングアウトをシミュレーションしその影響を計測して仮説の検証を試みた。

設問の前半の20問は患者・感染者のイメージを問うものであるが、質問紙では特定の好意的あるいは拒否的イメージを喚起しないようケースが設定されているのであるから、回答者が中立的回答を好むなら「どちらかといえばそう思う」と「どちらかといえばそうは思わない」に回答が集中し、慎重な回答傾向がある場合「どちらかといえばそうは思わない」と「そうは思わない」に回答が集中すると考えられる。カミングアウトしない場合、好意的イメージの回答では前者の傾向が認められ、「どちらでもない」という回答が用意された場合ここに回答が集中したと考えられる結果であった。一方、拒否的イメージの回答では後者の傾向を示した。つまり、感染者に関して、好意的イメージには中立的に回答し拒否的イメージには慎重に回答するという傾向が認められた。これは感染者に対して否定的感情あるいは拒否的先入観を持つてはいけないという意識の表れではないかと思われた。

カミングアウトしない場合と比較してカミングアウトした場合の方が、好意的イメージの項目の回答はより肯定的であり、一方、拒否的イメージではより否定的であった。つまり、カミングアウトのイメージへの影響としては、好意的イメージは強化され拒否的イメージは否定され概ね好印象の方向に変わると予測される結果であった。ただし、個々に検討すると、好意的イメージの「穏やかな人だ」と「慎重な人だ」の項目では他と逆の傾向を示しており、一方拒否的イメージの「融通のきかない人だ」の項目ではカミングアウトの影響は認められず、カミングアウトという行為が現状では無思慮な行為として受け取られる可能性も示唆された。

後半の14問については、感染経路・回答者の性別に関係なく、感染者の隔離や辞職には反対で危険性についても否定的で、感染者に対して同情的な傾向が示されているが、これらの傾向は感染を他人事としてとらえた場合の回答でいわゆる建前論の結果と考えられた。一方、自分が感染者になった場合を想定した「あなたがX男(X子)の立場なら病気のことは秘密にしておく」と「あなたがX男(X子)の立場になれば周囲の人は冷たくなる」の項目については肯定的回答が多く、学生は差別・偏見を既成の事実として認識していることが伺われた。カミングアウトしない場合とカミングアウトした場合の回答を比較しても、イメージの項目ほどの有意差を認めず、これらの項目についてはカミングアウトがほとんど影響を与えないことがわかった。

著者は、人が他人に対して悪いイメージあるいは良くないイメージを持つと人間関係が悪化して差別・偏見を惹起し、イメージが何らかの理由(この場合はカミングアウト)で好転すれば差別・偏見の感情が抑制されるのではないかという仮説を持っていた。本研究からは、カミングアウトによってイメージが好転することはほぼ確認されたが、しかし、同時に回答者の態度等には明確な変化が認められないという結果も示された。差別・偏見の発生段階においてはイメージの悪化が重要な意味を持っているのかもしれないが、いったん発生してしまった差別感やイメージが好転しても容易には変化せずこれを変更させることは困難であるということかもしれない。ところで、未知

の危険に対しこれを避けるという危険回避行動から感染者への差別・偏見が短期間の反応として生ずることは理解できるが、正確な知識が普及し日常生活では感染しないことが明確になっているにもかかわらず、学生のほとんどが差別・偏見の存在を確信しているようである理由は何であろうか。彼らは、実際の感染者をほとんど知らないのであるから、彼らの差別・偏見に関する認識は彼らの情報源に依存すると思われる。学生はエイズに関する情報をマスコミから得ているが^{3,4)}、マスコミは差別あるいは偏見があった場合にしか報道せず、そのため差別・偏見が過度に既成事実化していることが、カミングアウトによって態度等の項目において変化が認められなかった理由ではなかろうかと考えられた。

感染経路別の比較では、血液製剤による感染の場合の方が性行為による感染の場合より、感染に対して責任がなく同情されるという傾向が著明であったが、これは血液製剤による感染が被害によるものであり感染者は被害者であるという認識の現れであろうと思われた。そのほか、女子学生においては血液製剤による感染の場合により好意的印象を持ちあるいは同情的である傾向が認められ、特にカミングアウトした場合にその傾向が明確に現れていた。これは、感染者が男性であり性行為による感染の場合は「自業自得」の疾患¹⁰⁾と考え同情的になれないという心情から説明できるかもしれない。しかし、全体的には感染経路による差異は顕著なものではなかった。

性別による回答の差異の傾向としては、女子学生の方が男子学生より、好意的イメージを抱き、拒否的イメージを抱かず、また態度等の項目でも女子学生の方が感染者に対し同情的であると認められた。女子学生の方が感染者に好意的・同情的な傾向を示すことは他の調査でも指摘されている¹¹⁾。しかし、一部ではあるが感染者が女性の場合には女子学生の方が感染者に不利な回答をしており、現在の日本における患者・感染者が男性に偏在していることが影響を与えるのではないかと考えられた。感染経路別では、血液製剤による感染の場合に性差が多く認められるが、これは被害の被害者としての患者・感染者に対する同情的傾向が女子学生の方により明確に現れた可能性が大いと思われた。

今回の調査結果は、カミングアウトは感染者のイメージを明らかに好転させるが態度等には影響を与えることは少ないというものであった。また、血液製剤による感染の場合の方が性行為による感染の場合よりも好印象であり同情される傾向があり、男子学生よりも女子学生の方が感染者に同情的であることがわかった。今後は、項目間の関係を検証してより緻密な検討を行う予定である。また、今回の調査対象は、必ずしも性交経験が豊富ではなく¹²⁾かつほとんどがエイズ教育を受けた大学生であり、実際の差別・偏見は社会的現象であり広範な社会人を対象とした調査を実施する必要があると考えられた。

V 結 語

ケースビネット法を利用したシミュレーションを用いて、感染者がカミングアウトした場合の感染者のイメージや感染者への態度等について検討した結果、以下のことが判明した。

カミングアウトによって、感染者に対するイメージは好転するが、感染者に対する態度や世間の反応の予測は影響を受けなかった。

血液製剤による感染の場合と性行為による感染の場合を比較すると、前者の方が感染に対する責任がなく同情されるという顕著な回答傾向が認められた。

女子学生の方が男子学生より感染者に好意的である傾向が(特に血液感染の場合に)認められた。

稿を終るにあたって、調査に御協力下さいました、島根大学教育学部喜多村望教授、秋田大学教育学部野津有司教授、島根女子短期大学紫民芳前教授に謝意を捧げます。

(受付 '97. 1. 7)
(採用 '97. 8.25)

文 献

- 1) 国立国際医療センター/AIDS 医療情報室. AIDS 情報ファイル (111). 日本医事新報 1995; 3722: 113.
- 2) 国立国際医療センター/AIDS 医療情報室. AIDS 情報ファイル (115). 日本医事新報 1995; 3740: 97.
- 3) 荒川長巳. 大学生の AIDS に関する知識と意識. 学校保健研究 1995; 36: 641-650.
- 4) 荒川長巳. 新入生の AIDS に対する知識と意識. 学校保健研究 1995; 37: 121-130.

- 5) 宗像恒次. エイズに対する偏見と差別がもたらすもの. 宗像恒次, 編. エイズ・サバイバル. 東京: 日本評論社, 1992; 119-143.
- 6) 宗像恒次. 市民のエイズに対する偏見の態度と感染者の生活の質. エイズジャーナル 1991; 3 (2): 201-212.
- 7) 武田 敏. 偏見差別予防のエイズ教育. 教育と医学 1994; 42 (1): 6-16.
- 8) 金子由美子. 文化祭展示のとりくみ『エイズに関する差別・偏見をなくそう』. 体育科教育, 1993; 41: 111-115.
- 9) オルポート. 偏見の心理 (上). 東京: 培風館, 1961; 2-6.
- 10) 内閣総理大臣官房広報室. エイズ. 世論調査 1995, 7: 2-32.
- 11) 皆川興栄, 他. わが国における大学生の性・エイズに関する調査研究—第2報 エイズの教育・知識・態度について—. 学校保健研究 1995; 37: 401-413.
- 12) 木村龍雄, 他. わが国における大学生の性・エイズに関する調査研究—第1報 性行動欲求及び性意識・性行動について—. 学校保健研究 1995; 37: 386-400.

A STUDY ON DISCLOSURE BY HIV POSITIVES BY USE OF SIMULATION USING CASE VIGNETTES.

Osami ARAKAWA*

Key words: AIDS, HIV positives, Coming out, Discrimination/Prejudice, Simulation study

AIDS patients/HIV positives have been increasing in Japan, but a large proportion of university students, who have high risk sexual behavior, are not aware of the danger of HIV infection. Because of little disclosure by AIDS patients/HIV positives in Japan, the students have a poor chance of knowing of their risk in sexual behavior situations. Discrimination or prejudice toward AIDS patients/HIV positives has suppressed disclosure. However, as the real risk changes of disclosure is unknown, a simulation study, using case vignettes, was carried out to measure risks.

A total of 1,128 university students (487 male and 641 female) were asked to read one of six vignettes describing HIV positives, that consisted of three infection routes (one by blood preparation and two by sexual intercourse) with disclosure or without disclosure. After reading a vignette, they answered questions about the images of HIV positives and their attitudes to him or her.

As a result of reading these vignettes, friendly images were enhanced and the disagreeable images were decreased, but students' attitudes were unchanged. Significant differences were recognized in attitudes concerning responsibility for the infection and sympathy toward HIV positives, depending on the infection routes (blood preparation or sexual intercourse). Female students had a tendency to be more favorable to HIV positives than the male students.

This simulation study showed the difficulty of changing students' attitudes regardless of the image of HIV positives, and demonstrated the need for effective action toward reducing discrimination or prejudice.

* Health Administration Center, Shimane University